

まんだら通信

第212号 (通巻247号)

平成26年02月 西暦2014年 佛曆2580年 皇紀2674年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高樞 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org



天国からの“お迎え”
～穏やかな看取りとは～

仏さまが「お迎え」

明治の始め、ラフカディオ・ハーンという人がいました。この人は西洋人ですがキリスト教徒でしたが、キリスト教では、神様は人間のために宇宙を造ったので、自然環境も人間の考えで住みやすいようにしてよい、という考え方ですね。

こういう考えになじめないまま、世界のあちらこちらを旅した後、山にも川にも大木や道端の石ころにも、台所のへつについても囲炉裏やトイレにも神様仏様がいて、生き物ではない道具にも魂が宿る、と信じている日本人にほれ込んで、この国に住みつき、ついに小泉八雲という日本人になりました。

そして「日本人は臨終の時、まるで襖を開けて隣の部屋に行くように、あの世に立つ。」といったそうです。当時はまだ、

あの世は先祖さんや、先に逝った親たちが住んでいる楽しい世界、と日本人みんなが信じていたということですね。

明治政府このかた、西洋に追いつくために、今の科学で説明できないことは遅れた考え方、という『合理主義教育』を推し進めてきました。

戦争に負けてこれから先どうなることかと思つた時もありましたが、日本人の律義さや勉強熱心、働き好きなどがあつて、今、世界稀なお金持ちの福祉国家になりました。私も人間の端くれですから、不満は言い出せばキリがありません。

でも、今からたつたの四〇五十年前、歯が抜けたままのお年寄りも当たり前でし、苦しみながら、手遅れのガンで死ぬ身内もいました。

三ヶ月に一度行く亀田病院の待合室は、順番待ちの人でごつた返しています。「患者さま、患者さま」と、朝から晩まで忙しいお医者さんや看護婦さんにいつも同情しているのですが、これはつまり、私たちの金回りが良くなったことと、医療制度が使いやすくなったから、ということではないでしょうか。

ひもじさや、寝苦しい夏の夜も、寝つけないほど冷たい冬の布団も今では嘘のようです。洗たくも機械がやってくれます。あの頃を思い出せば、今の暮らしは天国のようなものです。

その上で思うのは、幾らあがいても人間も遅かれ早かれ、間違いなく死ぬということですね。

科学者の中には「死ねば何も残らないんだよ」といつている人が多いようですし、また、私は他の人より知識があると思つている人も、その方が科学的だと思つているように見えます。

江戸時代「お経などという、カエルの合唱のようなもので救われるなど

というのは、坊主どものまやかしだ」といつていた有名な学者さんが、流行り病で臨終間近の愛娘に「私は死んだらどこに行くのでしょうか。おとうさん。」と聞かれ、返事が出来なかったことを一生悔いていたと聞いたことがあります。



去年八月、NHKの『クローズアップ現代』という番組で『天国からのお迎え』という放送がありました。

病院で、機械やチューブにつながれての延命治療ではなく、住み慣れたわが家で最後を迎えたい、という患者さんのお世話をする、福島・宮城のお医者さんの『在宅緩和ケアグループ』が、肉親を看取ったご家族五七〇人に、大掛かりなアンケート調査をした結果、亡くなる前に「あの世からの“お迎え”があつたよと話した人が、なんと四割近くいたという、ビックリするような数字が出たそうです。

「お迎え」は、可愛がつていたペットだったり、ご両親や親しい友達、仏さまと色々だそうなんです。「あなたが来るまで両親と話していたのに」と叱られたこともありまして、巡回のお医者さんが苦笑いしていました。そして「お迎え」を受けたと話した人は、みんな安心して穏やかに旅立ったという事です。

世界保健機関(WHO)も、これからの終末ケアは、医療技術だけではなくスピリチュアル(霊的)な対応が必要であるといつているそうです。

細かい理屈は端折りますが、私たちは誰もが間違いない仏さまの懐から産れ、誰かの世話になり、誰かの支えになつて生きています。気付かないのは自分だけで、今生きているという事は、仏さまがまだこの世にいなさいということですから、私たちはドゥーンと構えて、今日という日を丁寧に生きる事が仏さまのお心に叶うことだと思つたのですが、如何でしょうか。

▼冬至から40日余り。朝6時の鐘撞きは薄暗がりの中ですが、夕方5時の鐘撞きは随分明るくなりました。

それにしてももう2月。この1ヶ月、私は何をしていたのだろうと思つばかりです。

▼昨日は終日雪が降り続けました。千葉市では30釐を越えたことですが、この辺りは5釐ぐらいは積つたでしょうか。

雪国の人や仕事で車という人には叱られるでしょうが、久しぶりの雪景色は心が落ち着きます。

▼今日は都知事の投票日とか。「原発は即時停止」というお殿様が立候補しましたが、不思議な

ことを言う人だと思いました。これに乗かって「そうだ、そうだ」という人が沢山。こういう人たちは「今、原発は止まっているけど間に合つていないか」といいます。実際はそのために外国から高い燃料を買い、古くなって使わなくなった火力発電所を、無理に動かしているのが現実の姿だそうなんです。

そして、そのための費用が1年当たり数兆円。やがて電気料金が益々高くなります。

ただでさえ大変な中小企業は、持ちこたえられなくなって廃業や倒産といことになるでしょう。

一番の根っ子に、放射能は怖い

と国民に植え付けた、事故当時の政府の責任は大きいと思います。そのころ既に「今すぐに帰っても大丈夫ですよ」と学者や、放射能に明るいお医者さんが言っていたのに。▼ハコベ【ナデシコ科ハコベ属】。春の七草にあるように、この寒い中、よく見ると畑の縁の地質の良いところなどに元気に育っています。花は数釐と極く小さいながら、しっかりと“造化の妙”を見せています。子供の頃、飼つていたメジロのすり餌はこの草をやりましたし、小遣い稼ぎのウサギも喜んで食べました。

2014/02/09 龍渉

余滴

につぼん人情小噺

三遊亭鳳豊

第九十六話 もろ一人のエース

新春といいますが一月ですが、毎年二月に入りますと、球春という言葉が使われま

すね。
プロ野球各球団が一齐にキャンプインをして、しばらく途絶えていたカーンとバットにボールが当たるいい音が聞こえ、野球場に春がやってきたということでしょう。

実は、私もこの季節になりますと、野球が好きだった父親の墓参りに行くんですね。いえ、別に私の親がプロ野球選手だったわけではありませんが、亡くなるまで野球が大好きで、特に高校野球がはじまると、晩年はスコアブックをつけるくらい熱心でしたねえ。

なんで、そんなに高校野球が好きなのか、一度尋ねたことがあります。すると、全国から代表が出ていると、その試合のたびにその県出身の知人や友人を思い出す。だから、どの試合でも、どちらが勝っても楽しいんだそうです。なるほどなあ、と思いました。

そんな父親の墓参り。野球も墓参りも、まずはセンコウから。まさにこれが本当の孝行野球ですかね。今日はそんな野球の話をししようかね。私の故郷、横浜の金沢区というところに、横浜高校という皆さんご存知の野球の大変強い私立高校があります。よくY高と間違える方もいますが、Y高は横浜市立横浜商業高校のことで、松坂投手の出た横浜高校は地元では、横高と呼ばれています。

いまから三十四年前のことです。この横浜高校に愛甲猛あいこうたけしという投手がいました。野球ファンならご存加かと思いますが、甲子園で早稲田実業の荒木大輔投手と投げ合って優勝し、ロッセに入団した選手

です。のちにバッターに転向したとはいえ、プロ野球で活躍する選手ですから、愛甲投手は高校時代からすごかった。彼がマウンドに上がれば、絶対に勝つ、誰もがそう思っていましたし、実際、一年生からまさしく豪腕のサウスボーでした。ですから、野球部の中の彼以外の投手は、上級生も含めてまったく日の目を見ることはありません。たまに、相手が弱小チームの時に投げさせてもらえる程度で、大事な時にはいつも絶対的なエース愛甲投手にお任せだったので。

その控え投手のなかのひとりに川戸浩という子がいました。もちろん、横高以外の高校にいけばエースになれる素質の持ち主ですが、一年生から甲子園に出て投げている愛甲投手がいるかぎり、所詮控え投手でしかありませんでした。でも、この川戸君が偉かった。ただ、黙々とバッティング・ピッチャーをこなし、終わればブルペンで自分の投球をするという、いつ来るかわからない出番を一生懸命待ち続けたのです。

バッティングピッチャーって大変ですよ。バッターの打撃練習用投げるのですから、打たれる練習のようなものです。それもレギュラーや補欠のバッター全員のために投げてやらなければならぬ。バッティングセンターのマシン代わりのようなものです。

川戸君は、それでも文句ひとつ言わずに投げていました。ある日のこと、川戸君は、監督の命令で「今日は、バッティング・ピッチャーはいいから、学校の裏の階段の上り下りをしてい」と言われました。

「はい」。川戸君は、監督から「次の出番のために足腰を鍛えておけ」と言われたと思っただけでしょう。誰もいない裏階段を上ったり下りたり、一生懸命走っていました。一時間、二時間、三時間…

体はポロポロに疲れてきました。でも、彼は「きつとどこかで誰かが見ている」と思っただけで、もう一回、もう一回とがんばりました。やがて、あたりは真っ暗になり、誰も、誰も、何も言ってくれませんでした。でも、誰か、自分分は忘れられたんだ」と絶望感に陥り、命今した監督すら忘れてしまおう。自分はそんな選手なんだ。努力したって意味がない。野球をやめよう。

誰もいない部室で汗と泥にまみれたユニフォームを脱ぎ、合宿所に戻ると、「おい、川戸、どこに行っちゃったんだよ」などと仲間がのんきなことを言っただけで、笑っています。その晩、彼は監督宛の置き手紙を残して、合宿所を出ました。置き手紙にはこうありました。

「少し考えたいことがあります。家に帰ります」

監督は驚きました。そして、猛反省をしたのです。愛甲投手という絶対的エースのことばかり気遣って、控え投手の気持ちをまったく考えなかった愚かさを知ったと、あとで監督は言っています。監督はキャプテンに事情を話し、家まで行ってもらい、自分が悪かったと反省していることを川戸君に伝えてもらいました。素直な川戸君は何事もなかったように翌日からバッティング・ピッチャーを務めました。そんなことがあったその年の夏の甲子園、予想通り、愛甲投手を擁した横高は順調に勝ち上がり、決勝で荒木大輔投手の早稲田実業とぶつかりました。

この試合を覚えていての方はおいででしょうか。両投手の投げ合いを期待されましたが、実は初回から両チームに点の乱打戦になったのです。あの完璧な愛甲投手が打たれたのです。五回を終わって横浜5、早実4。監督は愛甲選手に聞きます。「大丈夫か」「すみません、

肩が垂れて」。さあ、どうしよう。その時、監督の目に、ブルペンで黙々と投げている川戸君が目に入りました。

(よし、あいつに投げてもらおう)
川戸君は、一点差のゲームで甲子園の決勝のマウンドに立ったのです。すると、一塁に回った愛甲選手が自分のグロブを差し出しました。同じ左腕にあとを託したのです。

川戸君はすさまじいプレッシャーのなかで投げました。六回、七回、八回。そして、最終回、早実も粘りを見せません。二死一、三塁。しかし、川戸君は、落ち着いていました。

あの、監督からも忘れられた真つ暗闇の階段を黙々と上り下りした時の苦しさを考えれば、ここで投げられるだけ幸福だったのです。

ワンボール・ツーストライクから鋭い球が打者の内角へ。

「ストライク!」「やったあ!」。川戸君は、大きく両手を上げました。すると、全選手が彼に向かって走ってきたのです。

川戸君はその後、社会人野球で活躍しましたが、いまは、横須賀の高校でコーチをしているそうです。きつと野球を通して素晴らしい教育をしていることでしょう。

いま、誰も見えない暗闇の階段を駆け上がっているあなた、今年もがんばりましょうよ。どんなにつらくても、いつか花が咲くと信じて。

今月も、MOKU出版と著者、三遊亭鳳豊師匠のご好意で転載させていただきました。

教えられることの多いエッセーは、いつもながら有難く楽しく読ませていただきます。